



日本の林業を担って

わたしの家は山の中にあり、4軒の家があります。25年前のある日、わたしは突然、叫びました。「林の中の木の家に住みたい」と。翌日、知人が丁度いい物件があると紹介され、即決して、良い空気、エアコン不要の環境の中で暮らしています。最寄り駅までは徒歩で下り40分、登り50分ですが夜は動物が出ますので徒歩は危険です。不便はこれくらいで、これ以上の環境はないと感謝しています。唯、一つどうしようもないことがあります。それは周りの木が大きくなって日照時間が短くなり冬が厳しくなったことです。伐採を要望しましたが駄目でした。材木に関連する知人は多くいますが、今月「日本の林業は終わる」というショックなメールを頂きました。

発信して下さっているのは、柴原 薫氏(南木曾木材産業株式会社代表取締役)、わたしは坂村真民先生の「朴の会」で知遇を頂きました。

先ず人物の紹介です。木曾は山の中新聞第361号より転写します。

昭和35年1月1日生まれ(58歳)四女の父親。孫一人。中央大学商学部卒業。養老孟司先生から[日本一の山バカと云われた父親の後を継ぎ、56年目の会社を経営する。養老孟司先生から、日本の林業を健全にする為の会に入会求められ暗中摸索中伊勢神宮の御神木の杣(三つ紐伐り保存会の木こり)の一人(木曾の国有林に在る天然木曾桧を斧で、寝かす木こりの会)。

船井幸雄先生から経営学を学ぶ(船井塾三期生)。

天外塾,原田塾に 学び生き方を学び実践中

坂村真民先生・石川洋先生から人間学を学ぶ。

野口法蔵先生(在家・臨濟宗妙心寺派)の元、年に数度、座禅断食修行中。

明治神宮の第三鳥居の国産桧納品。

靖国神社の150年記念事業の本殿横 エレベーター室の天然木曾桧の納品。

瀬戸内寂聴先生の岩手県の天台宗・天台寺の桂・檜・松・檜葉の納品。

鍵山秀三郎先生から指名受け、東京都大田区北千束に三階建て木造賃貸住宅建設する。

伊勢サミットのファーストレディーのランチの席に木曾桧で作った日本酒の器が採用となる。

筆者の追加、父上は業界・地域で伝説上の人物として有名です。

ベストピアでは人物の個人紹介は殆どしていませんが、伝記を研究したり、伝記を書いていると短い文で分かり易い業績紹介はとても大切であると知りました。

さて、柴原 薫 氏の「日本の林業は終わる」メールマガジン4回分を引用させて頂き、その非常に興味深い内容を要約します。

1、仕事がない

売上高は40分の1に激減

私が受け継いだ時代は本当に厳しい時代で、お客さんがどんどん減っていき、父の代には売上高が十三億八千万円だったのが、私の時代には三千万円ちょっとにしかならなくなりました。そして、四十五人いた従業員が、二十人ぐらいになりました。

山に立っている木があって、それを木こりが切り出して、それを柱にして製材工場に持っていき、そして大工がいて、家具屋がいて、建具屋がいて...、そして最終的にそれを買ってくれる人がいなければ林業は成り立たっていかないわけです。そういうことを考えたときに「林業が終わった」ということを感じずにはられません。

2、父の偉業は、あっぱれ！

日本の林業を振り返ると、戦後の日本の政策として、焼け野原になった山を一斉造林して、杉ばかり、ヒノキばかり、カラ松ばかり、という植え方をした時代がありました。

親父の山は混合林と言って、ヒノキ、桜、朴の木、ケヤキなどいろいろ植えて山を作っていました。どういうことかと言うと、ヒノキばかりの山だと輝かないのです。ヒノキの横にケヤキや桂など他の木があると、それらの樹脂や葉っぱの栄養分をもらって育つので、輝き方だけでなく、香りも全く違ってくるのです。私は親父がやってきた植林は素晴らしいことだと思っています。

3、森の神秘、「新月伐採」と「アレロパシー」

□「新月伐採」 新月の日に木を伐採すると割れにくい、燃えにくい、腐らない、虫が来にくい、カビにくい、というのです。この理由については、次のように言われています。満月の時は、木はエネルギーを吸い込み、逆に新月ではエネルギーを下ろしていくのです。つまり、新月の時は土の中に含まれている成分を吸い上げてこない。よって、甘い成分が無くて虫が寄ってこないということです。その化学反応で木が割れにくく燃えにくくなります。これは京大のある先生がデータ的に出したのですが、現実的にそういうことが起こりえるということです。でも自然界の中にほそのような新月の木も割れることがあるので、「割れない木がある」という間違った解釈をされないようによろしく願います。

□「アレロパシー」

例えば、森に熊が来たとします。すると、ある木が根っこを使ってテレパシーを発して、そのことを周囲の木に伝えるのだそうです。それでどうなるのかというと、いくつかの木が何らかの成分を出して、わざと搔きむしられる役割を引き受け、森の木全体が被害に遭うことを防ごうとするのです。

これと同じようなことが、キャベツにもあるそうです。キャベツは害虫が発生し始めると、全滅にならないように、その中のいくつかのキャベツは虫が寄って来やすい成分を自ら出して、虫に食べられてしまうわけです。つまり、他のキャベツが虫にやられて全滅になるのを防ぐために自己犠牲をしているということなのです。本当に不思議な話ですが、自分の種を守ろうとするアレロパシーというものがあるのです。

アレロパシー（英語: Allelopathy）とは、1937年にドイツの植物学者であるハンス・モーリッシュにより提唱された。

4、木の成長と需要価格

山に立っている杉が高さ30メートル、直系24センチから30センチ位の太さだとします。そのような木は60年かけて育つのですが、大体どれくらいの値段がつくと思いますか。実は1本300円くらいなんです。（末端価格は檜で5000円、他の木材は2500円位になる。加工賃、運搬費等がかかる）

もし全てヒノキで家を建てたいということなら、それが35坪なら、約350万になります。坪10万円です。ところが、ある業者に頼むと、ロシアカラマツという木材で建てることになり、同規模で75万円です。

我われが無垢の木と呼んでいるヒノキの木材は、1本でビール瓶約2本分の水分を吸い込みます。そして、空気が乾燥してくると吐き出すのです。ですから、湿度を整えます。またヒノキほどの自然の殺菌能力を持つ木は他にはないとも言われています。それから、日本の杉の木材については空気の浄化作用は世界一であるという京都大学の研究データもあります。

ですから、24時間自宅にいる奥様方のことを考えると、私は修整材よりも無垢の木を勧めます。（しかし、消費者には理解されない。キッチンには350万円も出すこともある）

5、棺で職人の道をひらく

それで最終的に落ち着いた先は棺だったんです。昨年度はおよそ130万人の人が亡くなっていますので、大きな需要があると考えられます。今の棺桶の業界の現実を調べたところ、大手の業者が中国から輸入して、それを1つ1万円から3万円で販売をし、セレモニーホールで10万円定価販売されています。当然ビジネスですから、いくら儲けようと構いませんが今や、ネット販売のAmazonでも2、3万円で売っているのです。私は林業の立場として、「それでいいのか」と考えています。そしてこんなことを考えました。

例えば、滋賀県の人がお亡くなりになったら、地元の木で作った棺桶に入れられて見送られるのが当たり前の中にする。そのために全国47都道府県でそのようなネットワークを作ることができないかと考えています。そうすることで職人さんたちを生かす道がひらけてくると思ったのです。確かに、職人さんにやってもらいと高くつきます。しかし、このことを提案していくと、1個10万円ならば買っても良いというお客様が居られ、すでに38人も申し込みをされています。

6、夢は大きく

それから、会津若松市に国指定重要文化財の「さざえ堂」という不思議な二重構造の螺旋階段のある六角堂があります。螺旋階段で3階のところまで登っていき、同じ階段を使わずに下りられるようになっていきます。建築学的には東の横綱と言われる建物です。私は今、これを復元しようと思っています。これは文化財なので全てバラバラにして作り直すと15億円かかるそうですが、新築で作ると5億で出来るのです。ですから、これを都内で作り、その正しい見送りする場と日本の職人たちが上を向いて生きられる処にしていきたいと思っています。こんな考えを話すとよく物笑いされます。でも本当にいろんな人たちと手を組みながらやったらできないことはないと思っています。

7、私の使命 ◆自分で道を切りひらいていく

我われは健全の森とともに日本の林業のために植林活動をしっかりしていかなければならない。それから、日本の文化を守るためには職人といった人が携わってやり続けていかな

ければならない。仕事を創り、そのステージを与えるための工夫をしていかなければならない。私が言いたいことはこの三つなのです。補助金は必要ありません。しかし現実的には林業も補助金漬けになっています。けれども、歴史上で補助金をいただいて活動した人の中にきちんと自活できた人を知りません。

上記は木曾は山の中新聞第 364 号から第 367 号を切り抜きで編集しました。
承認感謝です。
更に詳しくお知りになりたい方は下記へ連絡してください。無料です。

メルマガ配信登録

<http://www.rakume.jp/usr/access.jsp?i=105591&t=3&k=1&p=1>